

第十四回「公德文芸賞」の入賞作決まる
肥後狂句の応募、前年を大きく上回る

県内の高校生を対象にした第十四回「公德文芸賞」（一般財団法人熊本公德会、熊日共催、県高等学校文化連盟後援）の入賞者が決まり、11月11日、熊本市中央区上通町の熊本公德会カルチャーセンターで表彰式がありました。

今回は俳句、短歌、自由詩、肥後狂句の4部門に3962点の応募がありました。これは過去最多で、特に肥後狂句は2368点と昨年の2倍以上の応募数でした。審査の結果、部門ごとに最優秀賞1点ほか優秀賞、入選、努力賞が選ばれました。選者は短歌・塚本諄、橋元俊樹、俳句・岩岡中正、星永文夫、肥後狂句・野方正治、自由詩・丸山由美子の6氏でした。

表彰式では、最優秀賞受賞者に盾と賞状、副賞の図書カード、優秀賞受賞者には賞状と副賞が贈られました。最優秀賞と優秀賞に輝いた生徒が自作を読み上げ、「原爆忌と祖父のことを考えて作った」「感謝の言葉を素直に言えない自分の気持ちを表現した」などと、作品への思いを語った後、部門ごとに各高校の先生や審査員を交えて意見交換。審査員が生徒の質問に応じたり、作品づくりのポイントをアドバイスしたりしました。

最後に審査員が「フレッシュで若者らしい作品が多かった」「何をどう歌うか、自分なりの形でとらえよう」「生活のにおいのする歌を、これからも作ってほしい」などと講評しました。

受賞者と、作品・選評（最優秀賞、優秀賞のみ）は次の通りです。

【俳句部門】

▽最優秀賞

夏木立十八才は風になる

尚綱3年 古閑 華恋

【評】夏空に向かってすつくと立つ木立を前に、あの一本は〈私〉だと思う。私・十八才、今年から選挙権もあるようになって、もはや子供ではない。大人になったという高揚感に揺れて「風になる」というのであろう。自立の歓喜と少しばかりの不安があるって、十八才の立像を実に的確に促えている（星永）

▽優秀賞

ざくりと春キャベツ友の恋話

熊本信愛女学院2年 平嶋 遥歌

【評】何より、「ざくりと」「キャベツ」と、音がいい、歯切れがいい。しかも夏キャベツに先駆ける「春キャベツ」で色彩も明るく新鮮。いかにも若い人らしい。しかも、春キャベツを刻みつつ楽しく恋話をしている二人。明るいキッチン風景も見え、物語性もある句です。（岩岡）

原爆忌白木の箱に眠る祖父

熊本信愛女学院2年 高田 侑奈

【評】実話なのでしょう。「白木の箱」がリアルです。「原爆忌」は毎年八月、灼熱の頃です。この灼熱が、身体全体で「原爆忌」を連想させます。ましてやこの句は、「祖父」。

まさに「骨肉」の思いの深さです。一句が簡潔であるだけに、いつそう思いの深い句となりました。(岩岡)

冷麦のコップに丸い夢の粒

水前寺高等学園2年 宇野 七海

【評】俳句の表現は、「写生」から始まります。写生するには、まず焦点を定めることが大事ですが、この句は「冷麦のコップ」の小さな「丸い粒」に焦点を当てて成功しています。さらにこの小さな水滴を「夢の粒」と見たことで、この句はたんなる「写生」を超えて「詩」になりました。(岩岡)

▽入選

田野結唯乃(阿蘇中央3年) 平嶋遥歌(熊本信愛女学院2年) 西内朱里(熊本信愛女学院2年) 高田恋好(菊池女子2年) 佐藤祐夏(尚綱1年)

▽努力賞

田中隆晴(八代清流1年) 中村帆月(尚綱3年) 齊藤芽久(水前寺高等学園2年) 中島菜々子(熊本信愛女学院2年) 菊川和奏(熊本2年) 松井美亜(城北2年) 園田葉(阿蘇中央3年) 永江優樹(第二2年) 田上万鈴(玉名2年) 久保莉々香(文徳2年)

【総評】今回は応募数も参加校も多くて、何よりでした。選者の星永先生と二人で協議しましたが、二人とも納得できる質の高い作品が得られて、感謝しています。この文芸賞(俳句)のレベルは確実に高まりつつあるというのが、私の実感です。

私が注目したポイントは、「真の感動」ですが、それは生活の実感からしか生まれません。高校生は、職業に就いていなくても、立派な生活者です。夏休みの宿題や部活の哀歓もあれば、友情や社会への思いもあります。今回は受賞作を見られても分かるように、こうした手ざわりのある多彩な感動がたくさんあります。これらの作品を読む側も、自分の生活実感に重ねて共感しつつ読んで下さい。

第二のポイントは「表現」ですが、これは十人十色それぞれです。若いと表現も時に甘くなったりひとり合点になりがちですが、それでも自由に個性的に自分の表現スタイルで作ってください。誰からでも分かってもらえて、しかも自分にしかできないような作品をめざして下さい。(岩岡)

今年も応募作品が増えたのは嬉しいが、質的にはいまいち。今まで同様、詠まれているのは蟬・花火・蛍に夏祭、また学園ものとしては宿題・部活、そして恋など。それらをごくありふれたことばでぼろっと書いて提出したような句が多い。それらを一度すつぱり捨てて、自分の周りの自然や生活の有様ありようをじっくりと観察し、常套と少し角度を変えた形に仕上げたら、質は大いに向上するだろう。

その点入選作には、それぞれ工夫があってもおもしろい。例えば「ざくりと」の句、恋の句だが、「春キャベツ」と組み合わせると何とも新鮮な感覚を盛り、「冷麦の」の句では、冷えたコップにつく水玉を「夢の粒」と見立て、ほんわりした青春性をただよわせている。その他「原爆忌」や「父の長話」など、今までに見られなかった題材の句もあって、高校生の俳句世界を拡大し、句境を進化させている。

これらを参考に、各校で少しばかりの学習があれば、次回の公德文芸賞の〈文芸〉は一段と輝くものになるだろう。(星永)

【短歌部門】

▽最優秀賞

階段をかけた上がったら空があり届かないけど片手を伸ばす

熊本マリスト学園1年 加藤 京亮

【評】 駆け上がる校舎の階段と青い空―、青春時代を象徴する今の場を上の句で提示し、下の句でやや生硬な若い気負いと瑞々しさを表現。只今現在が追い求めるものへの意志的な行為に若者特有の詩情があふれる。(塚本)

▽優秀賞

校庭を埋める真白の仮校舎横に傷つく校舎も並ぶ

熊本マリスト学園1年 藤本 雄大

【評】 「真白の仮校舎」と「傷つく校舎」をたんに並記しているだけだが、その具体性がイメージをより鮮明なものにし、重い事情を十二分に表わしている。そしてそこに、現実とじかに向き合おうとする意識的な思いが見える。(塚本)

車いす祖父の背中小ささにかけて苦労の大きさを知る

第二2年 馬場園 稜

【評】 病院か老健施設に祖父を見舞った際の歌だろうか。祖父の背中が思った以上に小さくなっているのに気付いた作者。背中「小ささ」の対称に、かけた苦労の「大きさ」を持ってきたところに工夫のあとが見られる。(橋元)

風光る青空続き飛行機が白線描く復興の地に

熊本マリスト学園3年 高橋 直佑

【評】 地震の後、県民を励まそうと、航空自衛隊のブルーインパルスが熊本上空で曲芸飛行を見せてくれた。この歌は、その時の光景を素直に的確に表現した作品。普通の飛行機ではないので「ジェット機」としたかった。また漢字が続くときは「続き」や「描く」をひらがなに。(橋元)

地球儀にとまれる白き蝶々は次はどの地へ旅に出るのか

第一2年 園田 阿真音

【評】 まず注目したのは文語体で作られていたこと。多分唯一の文語作品だったと思う。特に「止まっている」を「とまれる」と正しく表現しているのに感心した。蝶が地球儀に止まることは普通はあり得ないが、発想としては面白い。(橋元)

夏祭り去年と同じ浴衣着て去年と同じあなたを探す

文徳2年 鹿子木 千夏

【評】 やや控えめな言葉の運びのなかに、メルヘンのような情感があり、感性としての良さがのぞいている。過ぎてゆく瞬間に生じる若さの充実感が感じられ、心情が濃ま

やかに清新的に表現されている。(塚本)

▽入選

森野菜々美(第二二年) 村上夏穂(第二二年) 藏口武史(球磨工業1年) 立山芽依(城北2年) 林田唯夏(尚綱3年)

▽努力賞

井美輝(阿蘇中央2年) 小嶺璃子(荒尾支援1年) 小川燦(菊池女子3年) 吉村洵(熊本マリスト学園1年) 立蘭春佳(尚綱3年)

【総評】今年はずより応募数がやや減少したが、質的にはより向上の作品が多く見られ、選出にあたって楽しい時間を持てたことをまずは告白しておきたい。

今から五十年以上も前、「学園ソング」あるいは「青春歌謡」と称される歌が流行した時期がある。まさに評者の青春時代のことである。空に向かって上げた手に 若さがいっぱい飛んでいた——” というフレーズの歌(舟木一夫「学園広場」)がそれである。今年の最優秀賞の歌を拝見し、そのことをなつかしく思い返したこともある。

今日、高校生活のありようは、評者の時代とは格段に異なっているかもしれない。だが、待て待て、本質的にはそう変わらないのだという得心が、今回の応募作の大半から得られたのである。

「言葉は心象をつくる」——現実を踏まえた高校現場からの歌は、いわゆる短歌の技巧を超えて訴えてくるものがある。それこそ「あふれる若さあればこそ——」であろうか。(塚本)

今年の印象、爽やかな歌が多いということだった。最優秀賞の作品は、その爽やかさゆえに二人の選者が文句なくトップに推した。それに加えて、若者らしい情感が述べられている作品も増えた。これまでも「あなたを忘れない」などの思いを込めたものはあったが、今回はそれを客観的に表現した作品が目についた。明らかに短歌の指導を受けていると思われる学校があることがレベルを引き上げている。震災関連詠も昨年より良くなっていた。(橋元)

【自由詩部門】

▽最優秀賞

「創造」

- 1を聞いて
- 10を知るより
- 0から
- 1を考えられる
- 人間になりたい

第二二年 原 康大

【評】 一歩も退かぬ気迫の短詩です。飛躍力の強い人間賛歌には「創造」の題。何もないからこそ立上る人々。数多。そして青春。

▽優秀賞

「夕方、商店街にて」

あらそうなのと笑うおばさん
豆腐を売るリヤカーのお兄さん
子どもを引っぱり歩く奥さん
だりいとチャリ漕ぐ中学生
安いよと野菜を押し付けおじさん
人のごった煮交差点
ピコンと照れて赤くなる信号
唐揚げの香水をつける屋台
お腹を鳴らすサラリーマン

閉じたシャッターの向こうに消えた
私の憧れの景色達

濟々巒3年 北里 彩

【評】商店街の賑わう風景詩は、終連のキャンバスには、夕ぐれの寂寥感を連れて来ます。読む心の視覚にしっかりと届く言葉たちです。

「緑も青も…」

急に、雪のような雨が降った。
洗濯物を取り入れていると、一つの葉が。
緑で美しい小さな葉。
すると後ろから、「青い葉がでとるねえ」。
「青い葉？」と思い、もう一度葉を見るとやっぱり緑。
「青じゃないばい、緑ばい？」
「青も緑も同じたい」

そう言って、帰って行った。
初めは意味が分からなかったが、ふと考えた。
見方は人それぞれ。
いろんな色があつていいじゃないか。
いろんな想いがあつていいじゃないか。
心から考え深呼吸。
一つ一つ、ゆっくり思い返すと
いつかどこかでいろんな花が咲いているのだ。

阿蘇中央1年 水野 千滉

【評】会話相手との色彩感覚のズレをいぶかしく思った作者は、やがて詩的思いの深いと
ころで「いろんな花が咲きました」と歌うのです。「心から考え深呼吸……」の一行
が輝いています。

「てっぺんまで」

人は山をもっている。
険しい山、くずれやすい山。
ゆるやかな山、土台がしっかりした山。
それぞれの山がある。
それぞれの物語がある。

ゆるやかな山は、てっぺんに着くのが遅い。
くずれやすい山は、てっぺんにたどりつけない。
遅くても
コツコツ登る足があるでしょう。
くずれやすくても
新しい土を作り直せばいいでしょう。

人はみんな目指すものは同じ。
登り方が違うだけだ。

尚綱1年 井手 麻那美

【評】「人は山をもっている」の書き出しの大きさからも作者の心象風景の壮大さ凄さが伝わってきます。読む者たちのころろたちは、ひっそりと肩の力を抜いて、まずあるがままの自分の山のことを考えはじめることでしょう。

「母に」

保育園

友達ができた私に母が

「友達好き？」と聞くと

私は「うん、だいすき！」と答えた。

小学校

部活を始めた私に母が

「部活楽しい？」と聞くと

私は「うん、すごく楽しい！」と答えた。

中学校

テストを受けた私に母が

「大変だった？」と聞くと

私は「うん、難しかった。」と答えた。

高校

実家から離れた私に母が

「寂しい？」と聞くと

私は「いや、平気。」と答えた。

その時初めて
私は母に嘘をついた。

尚綱1年 岡田 ひなた

【評】「ひなた」と名付けて下さったのはお母様でしょう、たぶん。終連の〈初めて、私は母に嘘をついた。〉の笑顔の奥の泣き顔は宝石です。

「気もち」

君と出会えてよかった
君は優しくて明るくて
ちよっと不器用だけど
笑顔がとっても似合う君
君の瞳はいつも輝いていて
君のようになりたいと思う
ああこの気もちをどう表現しよう
これはたぶん、憧れというんだ

君と出会えてよかった
君は歌うのが好きで、甘いものが好き
他には何が好きなのか
もっと知りたいたくさんの君
今では少しも会えない君
君のそばにいれる人が羨ましいと思う
ああこの気持ちはどう表現しよう
これはたぶん嫉妬というんだ

君と出会えてよかった
君と一緒に遊んだり、笑いあったりしたい
時間があわなことが多けれど
君に会うと心が躍る
君の隣にいたいと思う
いつまでも、いつまでも
ああこの気もちをどう表現しよう
これはたぶん恋というんだ

君に伝えたいのは一つだけ
出会ってくれてありがとう

第二2年 柴田 駿

【評】「君」と出会ってからの心の動きに、「憧れ」「嫉妬」「恋」と名付けての、三連詩の構成です。それぞれの連のイントロ部には「君に出会えてよかった」と、甘くやさ

しいリフレイン。おしゃれな詩です。

▽入選

山口朝陽（第一二年）馬場優花（尚綱3年）城戸あかり（阿蘇中央1年）浦上心菜（尚綱1年）後藤成美（阿蘇中央1年）

▽努力賞

市原知樹（阿蘇中央1年）八代陽菜（尚綱1年）荒木誠（阿蘇中央1年）濱田湧壮（第一二年）杉谷薫（阿蘇中央1年）

【総評】熊本県内の全高校生を公募対象とする公德文芸賞が14回目となった。今回の自由詩部門には全、一〇一名、一〇二編の応募があった。

参加生徒達の参加作品も年毎に充実、向上してきた。

初対面の喜びをこめた年に一度のめぐり合いである。美しく答えたい！と。

原稿の束をめくる。一篇、一篇のひたむきな作品を残して、いつの間にか卒業していく応募者達。今回もまた思いがけない程多くの果実の記憶をもらった。（丸山）

【肥後狂句部門】

▽最優秀賞

難しかー たった五文字のありがとう

城北2年 古賀 桃佳

【評】感謝、お礼の気持ちを表す「ありがとう」はたったの五文字。その五文字が素直に言えない。自身も含め誰もがスムーズに出るようになれば世の中はもっと明るくなるだろう、という気持ちがかもっている。

▽優秀賞

前向いて 振り返るのは後で良い

尚綱3年 田川 あい

【評】若いときは目標に向かって真っ直ぐ進む。それが若者の特権。いまは後ろを向くのではなく、前を向いて進んでいこうというメッセージ。

難しかー パズルのピース埋まらない

御船2年 清田菜々子

【評】パズルは面白いけど、なかなか難しい。そのへんの心理を詠み込んでいる。

前向いて 下向く君に明日は来ん

玉名2年 柴尾 直輝

【評】前を向いて挑戦していかないと、道は拓けない。下を向いても何も進まないのだ。

しまった 夢ん中では起きたとに

第二二年 林田 竜祐

【評】定期試験を前にしばらく寝てから、勉強するつもりがそのまま熟睡。「夢ん中では起きたとに」という付け句がユニーク。

難しかー 調理実習さしすせそ

球磨工2年 村山 侑瞳

【評】「さしすせそ」は料理するさい味付けの基本となる五つの調味料の語呂合わせ。言うは易いが実践になると難しい。着想が面白い

▽入選

元田紀代香（第一二年） 坂口天音（御船2年） 中村浩一（盲学校高等部1年） 吉永菜々子（九州学院1年） 八代陽菜（尚綱1年）

▽努力賞

伊藤沙也加（城北1年） 前田拓馬（第二二年） 村田祥穂（尚綱3年） 吉川舞（玉名女子1年） 杉本篤紀（熊本北2年） 高橋直佑（熊本マリスト学園3年） 宮田瑞希（御船2年） 小川竜士（球磨工3年） 前田果林（城北3年）

【総評】肥後狂句には、昨年を大きく上回る千九十六人、二千三百六十八点（昨年は千百三十四点）の応募をいただきました。若い人たちが郷土の短文芸に関心を寄せていただいたことは、うれしい限りです。

肥後狂句は笠（お題）に十二音で付け句するものです。字余り、字足らずはダメです。おそらく初めて句を作ったという人がほとんどと思います。字余りの句や、「肥後狂句は難しい」といった句も結構ありました。その半面、上位の句はいずれも清新で、若者らしい心情のにじんだ句ばかりでした。選考には頭を痛めました。最優秀には自分の気持ち素直に詠んだ古賀桃佳さんの句を選びました。

ただ、「難しかー」の笠では、「祖父母の熊本弁が分からない」という趣旨の句がたくさんありました。祖父母の使う熊本弁の意味が理解できない、というのです。家庭内のコミュニケーションは大丈夫なのか、熊本弁はどこへ行くのか、そんな心配もしています。（野方）